

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

KODAK  
LICENSED PRODUCT

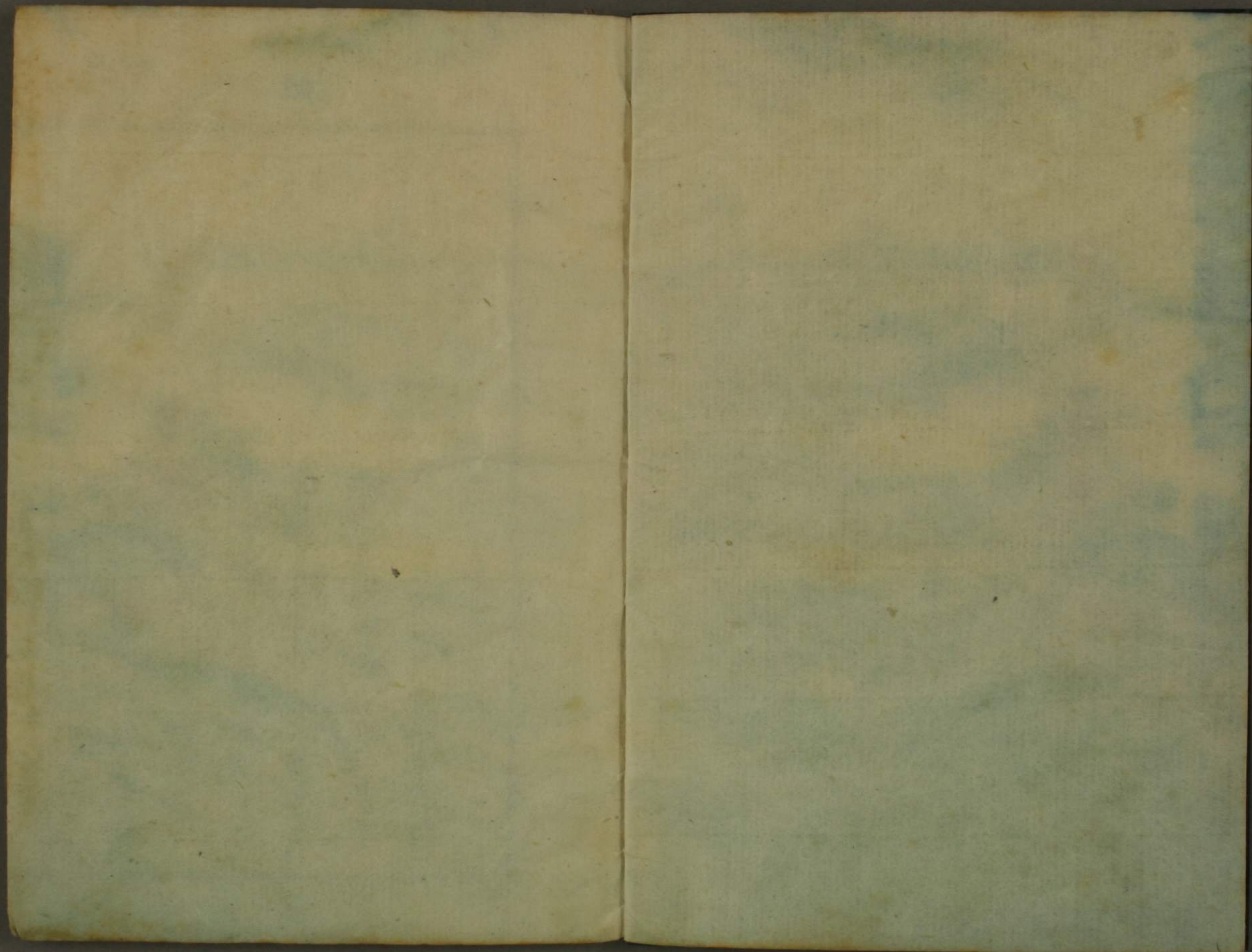
Blue 1 2 3 4 5 6 8 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Cyan 2 3 4 5 6 8 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Green 4 5 6 8 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Yellow 8 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Red 9 10 11 12 13 14 15 17 18 19  
Magenta 11 12 13 14 15 17 18 19  
White 13 14 15 17 18 19  
3/Color 17 18 19  
Black 19

標註五元集

2152  
3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20  
JAPAN  
TOYAMA







門利 5  
番 2/52  
卷 3



史記三十三

季氏與郈氏鬪雞季氏芥雞羽

郈氏金雞季子怒曰而侵郈

氏郈伯亦怒平子夏於魯國

大乱

○唐士三六賭ニスルト見エタリ

○杜律ヲケフノ雞ヘカケテ書タリ

壇ホレイ

○壇ホレイ

○里公ミヤスニ燃ハ美木ナリ

類樹文集下畫臨各尊依類  
鬪雞之戲玩尚矣季郈之芥羽  
金距之後唐皇盛於此在于傳  
賦韓聯杜律之原則是戲玩弄  
騷壇者而共載籍之所見歷歷  
焉我朝雖未聞其權輿堂上  
以及里閑為佳節桃園之戲玩  
也又已舊而前記之所錄可以









○今皇之臣里ノ公等音三

下浣百之叙  
精王良又臣附諸  
三品賜馬車之  
對聯立論人音  
致罪廷昔  
姑蘇分神國之  
其由是所  
鎮領西

○治鷄坊已カ音ニ出タリ

○鳥ノ時申我カ羽ヲ以コミ  
ヲ拂フ  
○ツレト艸信濃ノ前司行  
長七トクノマ全ヲニツ志レシ

標註五元集卷下  
待霄  
一合  
左右二字  
一乃耐白子  
忠臣亦第の  
五德乃冠者羽團扇を



ニテ五トクノ冠者ト言ハレシ  
ナリ

もつて開いず東西く  
むつ 玄宗皇帝乙の酉  
のうー三月三日に誕生あ  
りーゆ唐土のとりを  
何つめ給ひて七州の藩生  
いはらうやまひの餅草ま  
てふ馳走奔走有ゆうて  
桃園に樹つりして治



越鳥越鳥越鳥南枝へ  
師有り

雪以雪毛鳥鳥 賈島

鶏既鳴忠臣待旦鶯未出  
遺賢在谷

元史... 所生

一 鴉坊と名つる五百人乃量  
子守せせし日本乃守  
もその代乃つめを引  
今日の節會を初めて志  
臣の節を告閨門乃おを  
司せしる一日の計を鴉坊  
も有と信せしるし度  
行事其仰せしけ給も



けり花鳥乃心をやそ  
け列は翅七十番の縁負  
紙記す

凡例

一 五字ハ一日長安の荷やふ  
は遊遊よもろりてこれ  
を用也

一 三字ハ戴冠文捕距武の

○越鶏ハ越雪越島南枝ヘモ  
係有リ

○雪似鶯毛飛散乱  
人被鶴髦立緋細

○秃尖筆ナリ所生

ニツの注改行はして  
字面を改むのや  
一 二字ハ越後の雪ハ散乱  
鶴髦我毛乃何  
批以當時一形の意  
周也  
昔のやうに立うりて秃  
尖の力減合せ作り



一 變變りの假名を正  
 所生の實名をこももり  
 一手くの名はいろひさ  
 珍禽怪鳥の品を定む  
 ても諸國の大寄るれ  
 一を何よりふ晴り候  
 目くれ心もみく目  
 夕鷄のうりしよと

おも有ぬ  
 赤く中子の山産待宵  
 子三十五合とす小侍  
 のきみ少将の尾いつも  
 わかれある方人のれ  
 則二卷の題号とす  
 物加和の苑人筆とす

亦と申事ノ御坐候ハ行司  
 と言葉角カニカケテ書タリ  
 〇古文ハ毛 小侍臣  
 待宵小吏り待の声聞を  
 阿かぬつれ乃 勢ハ物ふ  
 〇おのが音ふつき別れの  
 有とふ知つてやいつふさ  
 のつらん  
 〇初と申と君うつらんもの  
 葉と申と君うつらんもの  
 からん



〇古文ノ序 小書野  
 猛キ武士ノ心ヲナタメ歌ニマハ  
 左折ハ源氏ノ正ホシ武ナリ左  
 〇古文ノ序 小書野  
 猛キ武士ノ心ヲナタメ歌ニマハ  
 左折ハ源氏ノ正ホシ武ナリ左

一 二合  
 御簾ツツミあて撮ツツミかきすや花冠  
 戴冠文ツツミ

坐ハ大臣ノトリ文官ナリ  
 〇古文ノ序 小書野  
 猛キ武士ノ心ヲナタメ歌ニマハ  
 左折ハ源氏ノ正ホシ武ナリ左

臣ノ鳥ノ爪距沖奕ツツミト小  
 花冠トサカ朱冠サカトツツミを  
 左折武門源平乃威候  
 翼をうひつくるツツミ



○鶏ノイキホイナリ

くくとおめし  
文武兼備  
唱あ成す

三合

雪花

廣庭子風の輝尾の道

し字と

里

平志慶

○志賀ハ鶏ノヨキ所也

○志賀ハ鶏ノヨキ所也

○うつろまの入口の浦風  
○尾花尾の秋の夕  
れ

○志賀ハ鶏ノヨキ所也

敬感もいさ  
風波も小揮て花さうち

五字トス

出乃濱輪を  
尾も尾予かひせ

合其争ひ君子のさ

上下の貴賤あれ

はりるもせし行

心



○志賀之助イニシエノ角カ

○炭ヲ喰フトリ有

ある者までけくこの一枝  
を打て右へりけぬるれ  
より

志賀元助お上こすものか

音子

炭喰の聲もふもぬれぬ

乙字と次

里

○十月薬喰ニ合フヨリハ兼  
而ナリ太田道観カ歌ニカヨフ  
わがはとまきこそ今下のち  
うらめかきてはあま身と思ひ  
あつまる

○平家物語  
志賀ノ別當増

昔木賣官谷ノヨウナヒ  
キミトナリ全距ヘカニナリ

○關ノ東エリヲサス

十月汝かきてかきかるとはせ丸

二宮トス

豫譲リ昔汝追てけけ

餌をこし其鬼此きふ化す

讎を報へゆふこそ蜀鬼

のこめり

啼啼あはれり相子汝血も

せしる兵之丸ハ男の通リ称



○關ノ東江戸ヲサス

○片ツラ吞テト有リ羽風ニテ  
汗ヲシツメレナリ

関のこゝろの名将鎗下の

聲一晩世ふりきり其の月

その日と時をまろくすして

信やあま

五合

何缸

湛増。汗をまろく羽風をか

十乙字とひ

○文字テントウナルヘシ

○平家物語  
態埜ノ別當湛増

○昔米賣雪杏ノヨウナルモノ  
ヲハキレトナリ金距ヘカルナリ

ツマヨロヒ  
介距脱て米屋へつへまか

ヨロヒツマ

只白旗まつけとのゆた宣あ

まろくすして

はらあつてせし権現のゆ

前より赤白の旗負せしよ

赤きハ一羽もろくすてな











○俵モトリニ用有朕ノ文字題  
ノ朕ハカルツキヤトノ邊ナリ  
砂水ニムレ入ムヲトリ是 頼  
政ノ謠ムラ鳥ハ水鳥

○烏武者腹黒ヲ別ス

○袋双紙

○千鳥モカリヨ鶴ノ毛衣

○ウコツケイ丸十トナリ

俵の末孫。朕太郎と名乗  
て立白の上り砂水もむ  
カむもこの羽音足陣比類  
は右名はくつるあて  
人平もあつた骨をも鳥  
武者とくろり坂指さして  
しよ瘡の毛衣はうりて  
會稽山は徘徊せしうを

○左右ハワケルナリ足ノ毛ノ生  
タルカ松ノミトナリ見ルナリ  
○落花同シヨナシハナリ  
○此春ハ...

忽ち其耻を雪めしり後  
薬劑の陣をむくひ  
八合 長瀬もむくひ  
おられた毛芝を松のみり  
遠く蔭ヶ梅の下をむ鳥ハ米  
左右乙字 跡をむくひ



○此春八三日へ當ル文法

○常盤なる松のみどりも春  
来れハ今ひとりの色ま  
さりたり

○扱此方ニコレモ角カ言葉

○鳥宦五帝ノ時鳥ヲ以宦ノ  
名トス

志賀の関脇唐崎ひとつ松

く〜ひちり〜は今一

はのまはさりり扱此方

味あはばけを梅乃下をむ

庭を乃上毛も花をさり

ける昇殿うまわりて西階

近く賞院せ〜せ〜は宦

源の付にの扱持すもあ

○松ト梅トヲコニテ結ヒレ文  
法今ノ春マイニレエノ春マ昔  
ト人

○いせ物りり 業平  
夕やあ〜人春や昔の春な  
れと我をひとつハもみ身ふ  
して

○梅ノ花盛下言所ノヒキ扶  
持角カ〜此句ニテ結フ

○サシマ不首尾人

○いせ  
夜心あはきつふもあはやく  
さめけのま〜ま〜せ

ゆ〜を松と梅と其中さ〜あ

れ〜を昔扱持とや

さりま〜せりり〜のさ

治〜

九合〜

此首尾を扱とあ〜里

此首尾扱とあ〜下前員

ニ字



とやうつて

...

○男ト言文字角カニカニ心  
カニアリトエハ負タリト言ハ  
去ナリトノ判者筋ナリ

...

志水

食板乃羽實檢や浴次の

氏

さくらの首尾昔男の名

活れらるゝひねき羽羽

第の手本ふぬてうつせ

ふきふあうやうつせさの

恨み込目うつせ所心うつせ

○軍中角カトノ名ノリノヨ  
エホホトリノ朱冠ノ三枚有ル  
ヲ能登ノ三ツノ山ニ作タリ  
新宮本宮那智三ツノ山

○...

二宮とす

...



○ツケノ津ノ國

○前髪左右へカキアケトサカノ  
三枚朱冠ノヨウニ見エナリ是  
モスマイ

○角有ルモノハ牙ナシ角ナキモ  
ノハ牙有リ角牙有ルヲアクリ  
フト云ソレニハアラテ具足シタ句  
ナリト 八ナリ

めつ、勝<sup>ツケ</sup>野の筋と<sup>ツケ</sup>は

乙字

髪切左右へこきあけ大あ  
髪つてててて有様ニ  
おいさらの見冬とこ三番  
うつく。ニ北と冬角に  
るもの角牙あまもの  
牙見よりく夏は鬘野の

○メウタ勝トアルヨ軍中ノ荒  
手目書タリロニニステハナ

○いせ

昔の言のたののほやきいよほ  
はみつけの小櫛をささひは  
あたる

○メウタ勝トアルヨ軍中ノ荒  
手目書タリロニニステハナ

○出ニマト、出ニ園ナリ  
○島マ殿小作替リ所ニ髪尾  
ニ放遊アリ皆角ニテ書タリ

あ、み沢入るはけの小  
櫛もささあまもろかか  
津國乃ほけお昔黒ま  
く唐をゆめえりり多野と  
名付古ことり園籠とつあ  
子あ取舍より一作小錐  
銀目あえ遊野とつあ  
十一合



○鳥ヲクラヘルヲ有リサツマ扇  
トカケ出スマイノ出ル國ナリ

○ツハサヘ胡椒ヲヌルエ頭巾ヲ  
カフセラレタルヨウニテ歌鶏難義  
セントナリ

○韓信カヨキヨシキヨシキヨシキヨシ

○角カノ破レカフニステハ千ノ  
手ヲトリナリナリ大角カノ

百猪

勝るる扇薩摩ふむろ扇

左右乙字

里

ハ首へ胡椒頭巾の羽風

お勝るるるるるるるるるるるる

の勝更とあめりう破れ

争の時よ破楚の大元帥

○頭馬

○さつま湾隠岐の少彦我

有りて人ふハつけふハ重の汝

○サツマ殿小性角カ前髪花  
敷遊アリ皆角ニテ書タリ

や記されし

あり丸立ちり内朕へうつて

扇長の大兵琉球の後胤

薩广守我有とふ隠岐

此小島の荒者之に控りの

此上子ほつと刀所をそ

しり

そくしき胡椒軍



○足ニタチツケヲハキレヨウノ鳥  
ナリ覺悟ハ今度ハトフレテ勝  
タントキツト心ノ内ニ有ルカ  
ノ袋ノ内ニアルヨフニテ萌ヲフ  
クメリトナリ

○イクラモ々々合スル牒面ナリ

朗詠  
紫塵嫩蕨人拳手  
碧玉寒蘆錐悅囊

十二合

辰下

裁けけのさき覺悟也錐囊

乙字とす

里

取放一佐助ハハハハ合セ牒

捕距武トス

たちつけの絆田舎行す

○芦下足ヲ言カハムツカレキ手  
ヲ言ホトリトナリ行司ハカル  
○万葉  
上時のさの船橋よりさか  
親はさくれと我はさくる

○右モ又角カハカル合牒へ行  
ナリ吟味スヘキナ牒ハカツテ取  
放シタル方面白キトナリ殊御  
廢美扇ヲ上テ花ヲツカハセ是  
モ角カ

南城北枝梅開落已具  
東岸西岸柳還遠不同

みくろり芦とさきとせり

わたりさきと云わとせり

右も又入るるるるるる佐助

領舟橋より出て牒面合

せりの数極より竹ふいつ

くく取返りしりやの

とも鳥ハ無し亦取離

との及用をとあつし



○羽衣ノ謠トリカ鳴東トカレ  
又東遊ノ舞ノ袖トモ

音以て東ト合ヤ羽衣ノ曲  
一扇をまひぬ  
十三合

○柳ヶ瀬七本 金地名柳ヲ枉  
合セレヨフニカラト鳴ナリ  
○吾妻合羽衣ノ曲玄宗ノ新  
曲ナリ五百番鷄合ナレハナリ

柳ヶ瀬をつり合せし尾は  
左右二字  
吾妻合の曲流音を  
と乃子穿ひる寸羽風目  
ありし波玄宗乃こふ  
あり兩岸の柳乃より東

○朗詠  
南枝北枝梅開落己異  
東岸西岸柳遅速不同







○角文字イセノ枕言葉老鳥ノ距ノ弱クナリ

山形  
○大木

米  
十五合

角

角<sup>○</sup>や三<sup>○</sup>年<sup>○</sup>此<sup>○</sup>の弱<sup>○</sup>く<sup>○</sup>方

屯

馬子

植毛乃<sup>○</sup>此<sup>○</sup>や要石

こ

こ

○爪ニイノ字ヲカケテ作爪ナリカナハスレテ膝車ニ合シナリ

○う<sup>○</sup>て<sup>○</sup>も<sup>○</sup>も<sup>○</sup>や<sup>○</sup>板<sup>○</sup>の<sup>○</sup>要石我妻の中<sup>○</sup>ふ<sup>○</sup>は<sup>○</sup>ん<sup>○</sup>の<sup>○</sup>り<sup>○</sup>ハ

○四結トリムスフヘカ<sup>○</sup>ル<sup>○</sup>禪<sup>○</sup>ノ<sup>○</sup>四結ナリ神カ角カ<sup>○</sup>ヒ<sup>○</sup>ク

此<sup>○</sup>よ<sup>○</sup>い<sup>○</sup>字<sup>○</sup>は<sup>○</sup>け<sup>○</sup>下<sup>○</sup>道<sup>○</sup>と<sup>○</sup>出

と<sup>○</sup>み<sup>○</sup>く<sup>○</sup>り<sup>○</sup>年<sup>○</sup>の<sup>○</sup>功<sup>○</sup>程<sup>○</sup>と<sup>○</sup>執

行<sup>○</sup>す<sup>○</sup>ナ<sup>○</sup>り<sup>○</sup>か<sup>○</sup>め<sup>○</sup>石<sup>○</sup>四<sup>○</sup>結<sup>○</sup>を<sup>○</sup>取<sup>○</sup>て

ち<sup>○</sup>つ<sup>○</sup>も<sup>○</sup>動<sup>○</sup>る<sup>○</sup>神<sup>○</sup>の<sup>○</sup>力<sup>○</sup>乃<sup>○</sup>と<sup>○</sup>あ

人<sup>○</sup>程<sup>○</sup>と<sup>○</sup>荒<sup>○</sup>言<sup>○</sup>を<sup>○</sup>

十六合

十六合

雪花



○サレ毛黒キ内へ白毛ノマサリ  
レヲ言フ真クロナルトリナリ

○鶏合ヲ鯛合ト作タリ

○大津大黒屋某カトイヌ  
モアノイ名ナリ夷ト大コソトノ  
カケ合ナリ

○濡髪長五郎

○サレ毛なく漆ぬりき人想さる

乙字

油符以鯛合せしめて此は次抱

半面美人印

大黒屋の塗桶といへは大津

に隠れしつれを投ゆと

ゆゆしく大坂に濡髪いつ

○千守符

○千守符ノ將軍ヲトリ故油  
フトレタリ夷三郎ナリ角カノ  
手ニ刻有鯛合ニカルナリ

次り。サレ毛あきつゝさるゝ為家

大郷の二子夫木のをのめ

平似娘いしの木ぬ

きくれふ何のく人

蒲大を何とむく

節舎ふ呂れけさる桃九郎

と改めし油生の將軍三

郎との烏帽子橋の陰子



毛三匹百職合言ハナリ  
トイハレテ三羽ナリ魚ハ  
ナニヤ都、鉄軍モナリ昔由

○場ノ容形ナリ戸板楯三用  
ヒレヨフナリ

釣竿ハ旗ノ木ノ葉ハ  
るあそろくゆなぐ推考ニ  
下調ノ一尾ヨクマアツク  
されぬはり天下一  
十七合

大鑑ダイキリノ血ハ涿鹿タクロクノ板楯  
毎用

○朝市ノ跡形ナリ

○黄帝レエワトタカフ五帝本  
キニアリ其代今ノ世ト對シ寒  
夜ト温光カナヒト筵皆文ノツイ  
句ナリ  
○古戰場ノ賦古文漢カ晋カ  
ハタトツ、キレナリ

次田町ハ菜虫をくゆク古戰場

左右二字

くくろくの形古戰場を賦  
一て市間ハ戸を員ヒ巻ハ  
菜屑を掃其代ノ窮鳥ハ  
寒夜ノ鼎ヲ煮ラレシノ世  
カ闕餘ハ温光ノ筵ヲ肥ヒ  
む持ヒ



○カラタ千距ニ似タリ

○油トリナリ

○あしちやのて其ちや

玄旨

十八合

くもれ花のやうて屋の

くもれ花のやうて距ハケウの

二字とす

立朝

琉球の獅るよ油ハや漆ハか入

乙字

帰國の涉出産して居る

くがたきて季あーやて  
貞徳やうて其のちやと正

集よめいもよし十入ナリ

○あしちやのて其ちや

そのちやと十つ十ハかきぬ

とも思ふぬ人を思ふもの

クハ

○大閤ノ朝鮮陳晋子時代迄

百年モ立レヨリ言フ唐獅子

角カノ名

○句え才

つゝるやあも

カとリ

手懸の末強乃々十つ十

をを思ふぬより村里は時

を報して調の乃々其

其の中にも牛といふも唐

獅子の羽毛を膏うめは

下黒牡丹も中一これ

敵乃鉄箭をすはらうり

剛豚タリの力をうをばんと計











Handwritten text in the upper right section of the right page, including the characters "文子" (Fujiko).

陣も距ちもされぬその  
ち十八九斗ある女房の大  
ふり羽をひるして陸の  
子一を招きしむるひ  
風は扇を対りしり舟を  
をふりてかめめめめ

洞滴

○毛ヲウエシナリ老鳥ノ雲ノ  
ヒンツラ結ヒヨフナリ

○サカンナル鳥イエ目包ナリ

○唐人の舟をうかへて遊んで  
ふらふら我せこ花のつせ

○三月三日柳カツラヲサス  
サカハケハ髻ハケノヨフナリ

鬢毛や元ものーるぞ乃鬢  
こぞとあ

目包そのいりもさうくや羽音  
二字

今日そのつせこ花のつせ  
ふらふらあもあもあも  
朱冠元々



廿九日...  
 三月三日...  
 ...  
 ...  
 ...

乃さの撃と仰山...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...  
 ...

陣中...  
 計...  
 廿二合...  
 ...  
 ...



○日本記手ノヒラナリカニマル  
ノヨフナリ鳥ノ育スマイカ  
ハナリ  
花踏惜少年春朗詠ナリ俗  
二十六ニテ録ヲ當ルト云フニカ  
ル

鳥と重称せしむ雄と雌  
こいさし文合比翼のつり  
あもかり ながく長くして  
尾さしつる比尾も尾なり座  
下もふれをあす其さま

男色そあけあひいり程  
かく血氣壯ガこよ骨肉たく  
あしく成丁初生合機の心  
さしを忘ぬる中掌外く  
すり下くへ回ッ少年の春  
を惜める思ひ深察す  
名ハ十六もや初子合  
板尾の毛抜合る進退







羽料遠寄りして面よむる  
 羽料遠寄りして面よむる  
 羽料遠寄りして面よむる  
 羽料遠寄りして面よむる

黒と名乗て後負す所の  
 七知り付付りぬ水白味方  
 の交り毛あつて紅くは遠  
 寄り右よ付りと引合りり  
 羽料遠寄りして面よむる  
 羽料遠寄りして面よむる  
 廿四合  
 右此

○開元イテニマリ揚貴妃トケレ  
 ノ雙六ノアラソイシタハムレアリ  
 ○十歩ニカケラツム言フヨリシテ  
 ヨセトリリ糧ヲ持來タレリ

六宮乃簾とあつて毛色ふ  
 百之  
 地下の寄羽の糧を包こりり  
 左二字右乙字  
 鸚鵡局中盤に死んで双の公道  
 を崩しつゝたぬし同元  
 の遺事之電愛一身は何  
 と六宮よなつてあつて美毛



○ヨウキヒカ文法ヲ書タリ骨十  
キ蚪カキ蛙催馬樂ナリ

○開示トテニヤリ舞貴改ナリ

つゝのあゝあゝひよ氣を吞  
目次登ッて膝何ひりさあり  
しあひ飛揚反動心を碎き  
筆乃ふつめと見え  
田舎をふふのうらな於て  
骨あそび柳カキ蛙歩食糞  
漏れ倉つて羽虫こやつ  
毛生見苦あ牛房鷓目引

○當ノ歌アテカイセナリ  
○黒フレニ距ニタリトナリ景清  
是早羊者ナリ句合ノ句ニモ景

鼻引笑ひまゝらん花のあ  
りのまゝとて  
廿五合  
目逐きを當ふ仕うせ權三郎  
揮距武とみ  
景清うらなやむ仕けつめ  
呟言



清ク足ノ早サハ夢モ知レト晋子  
カ句ニアリ  
何某モ平家ノ士前ヘカル文法  
老ノ鶯此春ヲムスフ後三年ト  
景清ノ謠ニテカキタリ奥州合  
戦モ三月鶏合ノ時節

乙字と云 當ハ正當二月  
三日と云ハ其箭三日ニ夜も  
つて早クハくつと云  
日厨川のつゝものさの海と名よ  
あふ大島又合せて為名  
り何某も平家の家。雞清  
下翅を双ナリ兵老の掌の泪  
みくれば昔忘れぬ子抱吐

○長ク闕鶏スル故今ケルナリ氣  
ノ余リ櫻ノ根ヲツクナリ角カ  
ニモ行司ノワケルナリ有リアマリモ  
スモフニアル言葉

○若知鳥ノ謠ノ言葉鷹ノ雉  
ヲ輔ヨフニ仕立タリハ  
昔北風ト言角カ有ルニヤズ

分ちて下橋をけく何の  
右氏  
捕後、其の雉も、こけのひ  
行子、何れも、その心風を



雞ノ名款西行櫻譜ニモ近  
衛トノ、糸櫻ト有リ是ハトクノ  
名節會ノ庭前ナレハ櫻ニ橋ト對  
ニ書タリトライ役行司ナリ

ステニヤハ言葉  
ニテ行儀ノロマテ百トマリナ  
余リ舞ノ舞モレハナリ舞  
是ノ園舞スル若々マナリ舞

さし合を分て曰ク左近の  
陣ノ痛を吹一羽を揮て  
拵れしる近衛とめく糸櫻  
されし  
橋乃りけむる乃らうれし  
て尻とみせし難くア  
あつきの同と聽して今一  
番さし合を分て曰ク左近の

○炭桶へ相手モナクカ、マリ居  
高タトシサカ黒キナリ

○是モ角カノヨフニ作タリ地ヲ  
スリテ規ヲ角カニテモ言フ

炭桶へあて物か。同炭朱  
雪花  
霜利乃りまはる地すか  
廿七合  
笹分



○キヲトノヲ心ニカケテ書タリ

昔左乙字右ニ字トス  
たゞんとしふも一名なりて神  
子法樂勅をのこ取え事を  
郷あぢひあり地招ハ敵を  
うらそりよかまて息次功  
者くられは志はしもこつ  
寸尻志ありて物る炭  
都屋へかひり

○カヒタントリノ名

○鉾木  
○カヒタントリノ名

志ありて扇<sup>アラ</sup>一枚の札物  
廿八合  
百文  
伽昆旦の爪<sup>△</sup>は荊軻<sup>□</sup>の<sup>□</sup>しれ  
乙字とす  
アカとて初め笑ひる物  
五字威長



○カヒタント唄ハル、長崎ノ唄十  
ルハレ荆軻カカラフクンテト  
鳥ヲ指感陽宮ニヨセタリレシ  
カンガヨフニレタリ感陽宮謠

天上の麒麟人中の鳳凰と  
つゝハ後傑の英才をばす  
カヒタシめとつゝハるる俚俗  
乃らつゝも尤が凡そ荆軻  
力らつゝもあつゝて敵陣む  
りつゝもつゝもつゝも木意  
をばすつゝてハツ別り  
さつゝれ南蛮料理もつゝれ

○ホシ言ロトシノ  
庸角カ 狂言 翠簾ヘカ、リ紫  
イ殿ト書結ヒ今日ノ闕難ニ奇  
テ欄干モユク斗トシタリトリハ  
モノカハノ歌ナリ

つゝとありぬバアカ文字は  
馬鹿とゆゑひもあつゝ  
それをもつゝの笑つゝも  
こつゝりが距凡ハヤ巻の釣  
手も似て上つゝつて反つゝり  
起舞不洞法もてカあけ  
見くしよ唐角カのつゝり  
我國のつゝハるのつゝハる







○カイトリノ方ナルヘシ食三汁  
カケルコアリヤ言替々リ二日月

すまごやう雄之虎を養ふ  
のりハを用心して為聲  
目さきしくゆいれも

右ハ膝をつま左の袖ますり  
三十合

食三汁冠者世澄之額エリよふ  
ニ言しハ

○古ヘノナラノ都トカハル毛ノ色  
宜シキヲ云フヘシ

○鼻トリ狂言

白様

古<sup>ロ</sup>崎の奈良よけやけしハ装束  
乙字トス

鼻よりすまごハ左郎くハ  
しヤを扱てきりりしはく  
る飼くもそま思合てちつ  
とも油断あや字彙翁  
字の註ニ翁ハ鳥ノ頸毛ナリ



○神代ヨリクタカケ可考平家ヲ節々奈良法師ノ驚カセシヲアリタフ付トリナラノ葉ノ古事神代卷 リニ筒守ノヨフ昔ハカケレニマクタカケト云フヨリレテ書タリ

亦願字ノ注平本ハ翁ノ字あり後ニ頁ヲ加フヤみくありをつきりしてさるのエリモトとよむナハ國よりさるをいふ神代さるのさるさるいふすくんで花やうある古<sup>古</sup>時<sup>古</sup>の毛さるいふさるあるあるナハ廣中いふさる

○食ニ添テハ輪コトナハ文添

○食ニ添テハ輪コトナハ文添

○毛車キツカフニ組レ金物ノ糸ヲ車ノ上ヘカケルコトフト云フ跡ハ房イカ井下ルナリヒロヲハサフマヨリ出ルナリヒロフナキ

糸もものさるをちやうじさるのさるさる乃さるの古の字もさる結ひ合せるさるさるさるけ乃さるさる三十一合 左右こ字

毛車乃カカさるヤ<sup>タマ</sup>籠<sup>タマ</sup>屯<sup>タマ</sup>カ<sup>タマ</sup>先月



時ハスケヲ用蒼ノ上ノ謡ノヨ  
ニシタリ人タマイナトハ違フ  
キ駕ヲ人ニタマウルト云フヨ  
今奥ノ供駕ナト云フヨ  
ノ文字ヲサキカイタリ  
艾トリノ毒ニヤ可考

○蒼ノ上ナレハ待霄方ト女房  
ノ名ヲ出タリエシニ御所ノ  
忍ヒ出タマイシヘカル時メク御  
方皆源氏物語ノ文

○身ニ添テハ御ヒイキ(文法カ  
ルヨリ今俗言短利ナリヨモキ

伊・顯員ヤ艾ノもよの毒の毒  
毛車のおぼろつとよ  
物共のあかく喰あせ  
おあけは成車論いと名  
付り是ハ待霄方乃上臈  
のよより出されも忍ひ意の  
鳥のあやめ方ハ恨のこ  
ナシ亦方よそくして田

カモト棠上方ノヨフニカキタリ

○雞ハ背ヲ三伏ト置タリニツ  
指ト同レニニ入

未幾ハ平御サハニ書

○サハハ五ノミ

羽利是大切のおすあられ  
をよもきもと一乃は  
をよもきもと一乃は  
三十二合  
洞滴  
切り声や背を三つ伏せの  
左右二字

里



○手ノ玉カツラ角カノ名ニ  
○床敷ノ手角カノヨフニ書タ  
リ矮雞ナレナリ楚歌李夫人  
クレノフ掌ニテ二人舞タリシ  
ナリ或鳥ハ或人ナルニ

○身ニ云々  
○玉ノ

あやうもせ手ノ中矮雞を  
三伏のつちも手ノ中北むり  
つちももふへき利口の子合  
針穴宛毫乃争ひ精神を  
こしむも毫毫争ひすまふ  
の隠一とす  
三つ指をあらんハ七たの  
屏風も躍り行ふよの手れ

○手ノ玉カツラ角カノ名ニ  
○床敷ノ手角カノヨフニ書タ  
リ矮雞ナレナリ楚歌李夫人  
クレノフ掌ニテ二人舞タリシ  
ナリ或鳥ハ或人ナルニ

も四面の楚歌も舞も中  
以下手ノ中或者の曰  
打とふ説もあま面  
あやうもあまのひを打返す  
とらうも小腕の後員も  
千ヤホサのそりき筋も  
狂作さも何くもよす  
三十三合 左右二字







○疊好猫悪鳥ノ名對ナリトフ  
ケントノコナルヘシ

○桃花坊支考ヲ惡シ下心ナ  
リ三日桃ニエンアリ田舎トリヲ  
アツメシヲ笑フナリ二句ヲヒト  
ツノ評

○源平香今小篋香ト言フ大  
玉子鶴ノ卵ヲニツニ引ハリ香  
箱ニスルモノナリ

○頻鵝ノ卵ノ内ヨリ其聲諸  
鳥ニカハル  
般若スヘテ知ノコナリ

○照手ニ長者七色ノカイモノ  
名ヲ云付遣リシカソレニモナキ  
唐名ナリト東坡へ當テ書タ  
リ

きふきふの菓守子の親

多々好キ猫悪ひし手枝て

其日の遊身を修りけり仙

源のふよふやき白頭を彼

薬は染て染るるりか

廿四合 左文武共ニニ子

大玉子源平香乃りれもふ

習魚

義の端の荷を思ひを鼓きり

酒般若湯難鎖萬葉とい

ひくして八出家のつくさる

東坡居士性を見とけり

長暮ハ鰻をひり子の箱鉄

炮ハ河魺照るもいふる唐

名あり大玉子ハ近東乃



○今俗言ヲマタマ香ノフタ十ニヨリ百二十負

○三日ノ客形夕陽カタムキレ乱軍ノヨブニフンテヲ取レリ

異名ありてはるる親  
仁あり香此策相下と  
これらの相詞きて源  
いれき子成ぬはれし  
あさるれも母きり  
は是をまとい親きめ  
美しきもひよるれ  
大急るれ既夕陽西成ぬ

○南無八幡ト言フヨモナリ雞ノ尾筒ナリ花モ今ト言フニテ關雞ノ節ヲ出タリ

あつひいづつをりへ投上ケ  
或は是の内へ仕よはして犬  
乃氣の穴をせき後日乃  
軍をおつとやあるむ  
持とあつ  
三十五合  
南無ハ符尾筒をせきとい



○勝雞ハハタラキツヨク血ニホメ  
クヲ清水ニヒタストナリ關ノ  
清水四境ナリ

○冠里公ニテノ闕雞ナリ前ニ  
三十五合待霄是ハヲノカチ  
何茂鳥ニヨリテナリ

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

勝是をひくくそそ冥の清み

源氏十羽をちせとてふふ

十羽を出

源氏三十をすぐれて

こかへも廿五羽を合せり

是より別して後員を次

まぬの心ハ美雄乃臣を以

○おのころまよつとも別のはり  
そとともあつてやつふの  
はり

○軍ト角カトノヨフニ書出シタ  
リ

○四境ノ祭ハ世ノ中サハカレキニ  
白綿ツケトリヲ放シテ祭レイ  
有リ

○何モ四關ナリ

○願書軍ニ義仲太夫坊ニカ  
セレヨフニ作タリ

○田鏡不審韓詩ニアリト云セ  
ツアリ

王馳走をりて所神妙也

春那境の祭のり子第一成

厚升とて白綿つきの放

りき東ハお坂山南ハ立田

西ハ宍生ハ有乳乃鎮護

をけくた先一ツの願書を

認り給

治隆坊乃何某筆を取て



○ソレン六國少先ノ人

○四境ト神明トヲ文法ニ結フ

○關ノ清水逢坂ト前書ヲム  
スフウカイ手水遣シテ御手  
洗ノコフニ書タリ四境ノ祭リト  
言ハレニヨリテナリ

○鳥ノカリルモ行モヲ士卒ノヨ  
フニシテ家雞ノ魔ト己カ尾ヲサ  
ヒハイノコフニシタリカケトイセモ  
ノカタリ定家公天福ノ本ニテ  
ト是ハワルレ日本ニテコイヲ不用

田饒<sup>ニギハヤヒ</sup>ノ内をかり蘇秦ノ謀

を顯して神明約受の志

を乃屋<sup>ノノヤ</sup>ノハ関の清水

手<sup>テ</sup>ノコフニ書タリ

頂禮<sup>テイレイ</sup>ノコト

三十六合<sup>サツジュウロクカウ</sup>

春風<sup>ハルカゼ</sup>ヤカク引<sup>ヒキ</sup>モ家<sup>イヘ</sup>ノ魔<sup>マ</sup>

ニ書<sup>ニシテ</sup>タリ

○御節會ハ天子ノ御祝儀ノ  
遊ヒノヨフニ公事御宴トハ違メ

アリ留主ヲタノムト云カタリ武  
藏國三吉野今ノ川越ナリタ  
ノムノノニテ春梅ヲ持セタリ

○待霄ニテ取ツクシタレト又是  
ヨリヲノカ音ノ新手歌仙ヲ合  
トナリ三十六合ナリホノ、  
ト明渡ル其日ノ御節會ヘカ、  
ルイサマシ

○いせ物<sup>イセモノ</sup>ノ  
み<sup>ミ</sup>のたのむ<sup>タノム</sup>ノ  
ふ<sup>フ</sup>ノ君<sup>キミ</sup>ノ  
あ<sup>ア</sup>の  
○ま<sup>マ</sup>を<sup>ヲ</sup>見<sup>ミ</sup>す<sup>ス</sup>ノ

底<sup>ソコ</sup>下<sup>ノ</sup>

御節會<sup>ミツマツリ</sup>ハ天子ノ御祝儀ノ

遊ヒノヨフニ公事御宴トハ違メ

アリ留主ヲタノムト云カタリ武

藏國三吉野今ノ川越ナリタ

ノムノノニテ春梅ヲ持セタリ

○待霄ニテ取ツクシタレト又是

ヨリヲノカ音ノ新手歌仙ヲ合

トナリ三十六合ナリホノ、

ト明渡ル其日ノ御節會ヘカ、

ルイサマシ







○桃花雨ニ濡鳥ト敗軍ノカ  
サマレキ姿ヲ云カケタリ

○雞ノ趾ノナリ

○京鎌倉ニ五山派有

思ハ敗軍次福麻竹葦  
にカ乱ぬれきのさう尾  
五やゆかりり何ものさう  
らん落書

雞去<sup>テ</sup>昼<sup>ニ</sup>竹葉<sup>ヲ</sup>と<sup>ン</sup>ふ句<sup>ヲ</sup>書  
捨<sup>リ</sup>是ハ五山派の僧<sup>ノ</sup>  
聰句<sup>ヲ</sup>犬走生梅花<sup>と</sup>  
る對<sup>ナ</sup>る<sup>ニ</sup>と<sup>ク</sup>時<sup>ヲ</sup>と<sup>ク</sup>

○御男浪<sup>ノ</sup>ヨウ<sup>ヲ</sup>作<sup>リ</sup>尾花浪<sup>ハ</sup>  
ヘカケテ尾ノ字ヲウ<sup>ニ</sup>三<sup>ト</sup>カキ  
タリ

○うつ<sup>ツ</sup>尾花浪<sup>ノ</sup>入<sup>ル</sup>江<sup>ノ</sup>浦<sup>ニ</sup>  
尾<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>浪<sup>ノ</sup>よ<sup>リ</sup>秋<sup>ノ</sup>夕<sup>ノ</sup>暮<sup>ニ</sup>

○白黒ノ文字ヲ合<sup>シ</sup>基<sup>ノ</sup>ノヨ<sup>ク</sup>ニ  
作<sup>リ</sup>取<sup>リ</sup>ト<sup>ク</sup>云<sup>フ</sup>  
言葉モ基<sup>ニ</sup>テ<sup>リ</sup>巴<sup>日</sup>白綿<sup>付</sup>四

用<sup>ヒ</sup>る<sup>ニ</sup>も<sup>ト</sup>也<sup>ハ</sup>桃花雨<sup>ノ</sup>  
は<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>羽翼<sup>ハ</sup>醜<sup>ニ</sup>  
も也晴<sup>テ</sup>後男浪<sup>乃</sup>と<sup>ク</sup>つ<sup>テ</sup>  
返<sup>シ</sup>出<sup>ル</sup>た<sup>カ</sup>も<sup>ト</sup>一<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>尾<sup>ヲ</sup>  
見<sup>セ</sup>る<sup>ニ</sup>ハ尾花浪<sup>乃</sup>霧<sup>立</sup>  
三十八合  
白綿<sup>付</sup>乃<sup>ハ</sup>黒<sup>テ</sup>出<sup>テ</sup>取<sup>ル</sup>巴<sup>日</sup>



境ノ祭ニ作タリ  
○つくむほと肥タル客つこむ是

モ肥タル客  
杉ノ峙帘ノヨフナリ

○角カ白フントシタルハ素人ニテ  
家人ナトノ飛入角カニヤナリ

白乙字  
百之

桃節まつくむほとけり  
氏

異出乃男白綾のふん

一矢はけて中へて出

れは願角カ是モ難ヤ

酒陶氏心アリ

○杉ノ葉ニテ丸ク作シ帘ナルヘ  
シ酒陶氏ヲハシ為ニ四斗樽  
トカキタリ

○桃花ノ醉サメ曲水ナトアレハ  
リ己ノ日ノ精進腹ケツサイ腹ナ  
リ

○エリ毛伶人ノ鳥甲ノヨフナリ  
朋造まつくトハ相手ノトフ造頂  
ヲ突凶タルナリ胸マテまつく角カ  
ノ言葉ナリ

髮松ノ葉にまつくみか洞  
骨つんくろくして叩斗樽  
まつく丸くまつく梅花乃  
醉はる己乃日の精を後  
力量いくろく人

廿九合

くもや胸造まつく鳥甲  
捕距武







○當返シトハ向ヲナリ距ニテ一ツアテカイシテ見ルナリ  
○此時代茶セン髪時行シナリ  
尾サシ面サシトト、同シナリ

○軍中ノ崩口

...

左右乙字

其角

落少きヤ當△ツ△も距ハ  
茶筥髪○によりし尾ハ  
もヤ二十二番乃志□ころ毛ハ  
手弱き方也△トテカハハ  
難言○予ハのちハ崩口○トテ  
トテおさる

四十一合

雪花

鼻○ハ味方ハ引ヤ番椒  
也  
油ハ殿空○紺ハ庭莖  
二字  
嚴冬乃水ハ舌○ハ三  
伏○の番椒ハ鼻ハ汗○ハ

○鼻息ヲ吹カケルナリ味方ヘツレキテトカカレシ水ヲ吞ヌルトナリ  
○一ツノ謀ニテ空鮒ヲハレ散ヲミヌフリレテコマリフヒヲ打ナリ庭ヌミレヲツキ居ル姿ナリ

○嚴冬ニ三伏常云フ言葉寒ニモ暑ニモ  
トフカテレ喰ハ頂ヘ烟立モノナリ







桃花をたまりそも角刀の花  
斗かけつり

○芦ノ浦、伊勢國  
○のののうらと史本よある  
とまて書かえり

○木兔ニ築紫ハ似タトテ云々名  
ナリツクニハヨク角カモ出ル故ニ

一言誠おのりけい

トとととひ出さして棧鋪

より此花をいふなり

三田秀の由来ハ伊勢の国

志鎮

是乃裏ハ何なりきこるん

波せせせても洗はけり

成る高きに松河を置れ

鷓丸トツケレトナリ

○御家ニカ、イラレテモ里見山  
ナトノヨフナ九男ニテ宜レトナリ

○木ノ茅ホドクヨフニ踏合ニ距

いりほつときのしき

いをもとて鷓丸のいひ

いけ侍もいもきりや

い丸のいもても侍

いとの洋美かハ西家

い見世男かハ

卯十三合

右此







○ヒヨ子ノ脊中ニ昔キハノ字ノ有ルモノナリ  
鶯醒ハ魚色ノ段ニトサメルコトナリ  
緒ノ色モ昏ルナリ

○ヒヨ子ノ先キモ不見カケ廻リヤ  
ヤウキヲ母ノヒカイルトナリ

會ニ和曾書翁ニ云ニ和曾

賦意ニ神韻ヲナシ

并四合

ハ乃々ヤサシクノ寄来て醒

左右乙女

馬子

蒲利を母中れひ中るを蚯蚓ハ

醉といひさむもいふ好悉

の河みして心ふるつらり

何とも也未冠は

○非文ノ語ナリ

具ニ又ニモモレニナリ

○曾我ノ母ニ母ヨリ書出シ母

衣トヲキ羽袴ヲカケテトヒカエ

ルニ當勇ハ樊噲モ下サムケトナリ

母衣ノ古事ヨリレテ文ヲ結有

リ

○是ニ百ト

以距を来なきひあぢも

の性得自然ありとぬ

ひ何れ父河津殿の侍也

一万箱王母中の中れき其

母勇を備えて母衣中と

血羽袴中をきせりたて二樊

噲をも何さむと事

母也







十九人ニヤナト譽ニ飾アリ  
○笠ヲ冠ニ替杏ヲ瓜ニ書替タ  
リ軍中打死ノ時甲ヲケハイテ  
タキモノシタリ

○十テカク名目ナリ首ノ丸リノ  
毛ニカハリメアリ楠カ天王寺

○八島ノ謠  
潮ニウツルハ甲ノ星ノ影水マ空

ク行モ又雲ノ波ノ打合  
○水ヤカキヤカキヤカキハ  
ぬるるりかきりてすめ秋の  
夜の月

將不六  
○燕王閣

むらや冠重天雪爪  
あひもり楚地乃花  
をやいそて後  
いりあらん  
卯十六合  
榎勝を丸羽乃予り難波寺  
ニ字とひ  
毎閑

南京乃引音を猛り水や空  
乙字とひ  
天王寺の榎勝後記  
はふ所大坂矮雞の予り其  
まにいひりり今も  
丸羽りて心尾たう白す  
しりも煤きり源氏の嫡  
南京乃小左郎你力すあ



○滕王閣  
落 與孤鶩齊飛  
秋水共長天一色

○松風謠  
フケマ渡ロノ山ヲロレ關路ノト  
リモ聲ニニ夢ニ

*Faint handwritten text in the upper right section of the right page.*

いふれて尋常子引音を  
此大勢を合けちる中  
あはれ水天一色うして千  
多滄乃友ふはう関路  
のるも聲にに中

卯十七合

花月

送痛乃ひは本や痛夜

○弓折矢盡へ闇ク軍中書  
出タリ

○カニク鳥  
○もろこしの雪の竹山あは

*Faint handwritten text in the upper left section of the left page.*

乙字

朱冠<sup>ロカ</sup>癱<sup>カヨラ</sup>に潤<sup>ム</sup>フ三月待<sup>マ</sup>れり

鳥医師の曰<sup>ハ</sup>まみ乃い  
子<sup>コ</sup>痛折し矢盡てさむ方  
一 是當分乃弱なる  
手向ふあつたる  
以冠<sup>ロカ</sup>癱<sup>カヨラ</sup>希有に  
浦病也雪鼻を病鷹



るの聲りみちるく人のあき  
こつは

○此人ニシテ此病ナリ漢家只  
庸ト云フト同シ  
太平記三十九太元ヨリ日本ヲ  
セムル時破軍レ仙人リヨトフヒン  
ニ出逢仙藥ヲモロフ雅躬ヲ責  
メルトキ門ハ張レカハ皆敵破  
軍レテ跡ニテ万將軍ヨフヲワ  
ツライ死スソノトキハレトテクレシ  
藥坎イツレカ不知  
○閏三月命運ヲ全シテ居ヨ  
トナリ

氣聲ハ寒苦鳥飢也乃  
ふくひハ良藥を得る  
此るみハ病にこそ  
漢家乃むハ至レ癰發の  
膏藥にふくをとり  
ふくハの也云々  
命運を全シてかきね軍  
するハトツヤ

○木曾ノ妻巴ナリ巴波ノ文作  
タリ

○神明前ナトニアル雜花作ナリ

○平家物語  
三月三日ノ巴字ノ觴ヘカハ同

早八合  
波を蹴テ巴を負ハ格氣喰  
乙字トハ  
詮他子二人靜を合さる  
戴冠文トハ  
此北負る事ヤハシ七騎  
ウ中



○二人静  
山風ニ千ル花迄追手ノ聲ヤラ  
ント跡ヲノミニ吉野ノ奥深ク

とわかや 悟氣喰とは名乃  
悔かゝめ巴浪も 何事も  
了そ益をさゝりて 幾下機嫌  
振廻かゝめ粟津乃 松系  
お放されて後いつちりえ  
其場もさゝりて 大いし  
おあゝふニ 芳野乃 奥深  
小栗畠お放さる 美経

其影ヲウツレテハ人像書ナリ作  
リ鳥ニアタル 中ニ合テ書

○沿津雞名所足高山鳥ノ犬  
ノ高キヘカル大櫓角カノ手ナ

あり 飛徒ホカ 自らも  
とく其影を 作らさるは  
何れか 合々々々 努  
にるをすさすて 二人静  
卯十九合  
立朝  
沿津もさゝりて 鳥山や 大櫓  
氏と云



○人遣リ人マカセナリ

○足高山島原開取ヘカル

○心ニ吉原ノ廓中ヲ含テ書  
タリ

ま。系へちや人やり乃後乃戸

別ニ字トス

清見、関取乃血脉原吉

系をのききて宿こおら

利ノ者共也みかど

や

名高き君とも同

るをのきもて目出もの

○芳野唐士雞ノ名又傾城ニ  
用ユ

○良部出中

○放テヤリス八人遣リナリ

傳りあり乃何そひよ人

やりよ合と侍る芳野唐士

扱あり。さあハ翅の薰物

爪紅粉化粧して花美と

お人此心をあはめ。迷

をとりて後法度も成

鳥ともみか放ちやりねかの

幣木の巻ふ



鳥宿池中樹  
僧敲月下門

賈島

○童子ノ笑佛ヲワラハイノ雞  
ヲ合スヨフニ作タリ宜キ蹴合

身のうしろをあげくふらう  
まのうしろをいりかきまて  
音もあつれきうつさむ  
歌也心さかあつとそ  
五十合  
勝也推すも啄りも背下門  
戴冠文トス  
飲以

所ナリトノ諫報ニ用ユ

○送孟東野序 韓退之  
以鳥鳴春以雷鳴夏以虫鳴秋  
以風鳴冬

○谷ニ云フ  
○送孟東野序ニ用ユ

傳大士を雞鶩の魚ひと蹴合  
今ハ寺ノ乃鐘を召ぬ推敲  
三年の執りし一推力  
啄り品也韓退之是を相  
手みし以鳥鳴春と世上  
輪  
藏乃三影のまきあきを見  
別丁重なる







○ヨモキ<sup>三</sup>テ洗イホメキヲサマス  
ナナリ

○観音の清詠  
只頼め<sup>一</sup>のち原の<sup>二</sup>い<sup>三</sup>も  
系我世の中<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ん<sup>三</sup>か<sup>四</sup>き<sup>五</sup>ら<sup>六</sup>  
○舞臺飛清水<sup>一</sup>當<sup>二</sup>龍飛<sup>三</sup>モ  
音羽<sup>四</sup>

唯頼め血身<sup>一</sup>の<sup>二</sup>首<sup>三</sup>を<sup>四</sup>際<sup>五</sup>  
七ナ

五字<sup>一</sup>合

雪花

願<sup>一</sup>畢<sup>二</sup>丸<sup>三</sup>赤<sup>四</sup>酒<sup>五</sup>乃<sup>六</sup>い<sup>七</sup>も<sup>八</sup>

捕<sup>一</sup>距<sup>二</sup>武

げ<sup>一</sup>も<sup>二</sup>叶<sup>三</sup>さ<sup>四</sup>も<sup>五</sup>名<sup>六</sup>を<sup>七</sup>一

か<sup>一</sup>る<sup>二</sup>業<sup>三</sup>を<sup>四</sup>得<sup>五</sup>て<sup>六</sup>舞<sup>七</sup>臺<sup>八</sup>を<sup>九</sup>一

瀧<sup>一</sup>を<sup>二</sup>余<sup>三</sup>い<sup>四</sup>す<sup>五</sup>う<sup>六</sup>ら<sup>七</sup>く

○大江山謠

お<sup>一</sup>も<sup>二</sup>ろ<sup>三</sup>や<sup>四</sup>あ<sup>五</sup>の<sup>六</sup>酒<sup>七</sup>の<sup>八</sup>い<sup>九</sup>も<sup>一〇</sup>  
の<sup>一</sup>そ<sup>二</sup>の<sup>三</sup>息<sup>四</sup>を<sup>五</sup>思<sup>六</sup>ふ<sup>七</sup>は<sup>八</sup>ま<sup>九</sup>り<sup>一〇</sup>

○手玉ト言フト同シ

さ<sup>一</sup>い<sup>二</sup>の<sup>三</sup>も<sup>四</sup>を<sup>五</sup>取<sup>六</sup>ぬ<sup>七</sup>目<sup>八</sup>の<sup>九</sup>い<sup>一〇</sup>

朱冠<sup>一</sup>を<sup>二</sup>も<sup>三</sup>は<sup>四</sup>乃<sup>五</sup>て<sup>六</sup>次<sup>七</sup>を<sup>八</sup>り

願<sup>一</sup>ぬ<sup>二</sup>り<sup>三</sup>今<sup>四</sup>も<sup>五</sup>一<sup>六</sup>の<sup>七</sup>世<sup>八</sup>鬼

酒<sup>一</sup>を<sup>二</sup>力<sup>三</sup>を<sup>四</sup>共<sup>五</sup>に<sup>六</sup>佛<sup>七</sup>力

と<sup>一</sup>い<sup>二</sup>ひ<sup>三</sup>神<sup>四</sup>力<sup>五</sup>を<sup>六</sup>そ<sup>七</sup>う<sup>八</sup>と<sup>九</sup>も

は<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>り<sup>三</sup>な<sup>四</sup>ら<sup>五</sup>り

五十三合

爪<sup>一</sup>玉<sup>二</sup>は<sup>三</sup>深<sup>四</sup>に<sup>五</sup>ぬ<sup>六</sup>ら<sup>七</sup>り<sup>八</sup>の<sup>九</sup>後



○花ノ運桃花十リ

八左右し字  
筋嘴乃破軍をくま花の星  
瓜玉の河をくま浮舟沈ん  
特し後水流くつてえんり  
筋嘴は嘴より早より新  
きやりの手合乃くくや  
左切あるる花はは杞

志水

○品キトリツムシノヨフナリ  
○源氏の歌  
秋のさけ月毛の約よ我のさ  
雲井あけけし時のさも見ん

花乃陣をやすと  
五十四合  
引色も口比の煤乃時鶴毛  
土は字  
習魚  
相暹羅乃勢を随や花曇り  
何れ此巻よ秋の夜乃月  
月毛とひと詠詞正廣り



○初逢應  
釣簾の外猶や母の姿あり  
人日吹此油のなまむるめよ

○眠リヲ驚ス時トキラツクルニカ  
ヨフ

唐詩選

絳幘雜人報曉

○赤キ頭巾ヲ冠ル籌ヲサス

紅葉雞頭トカケ合フ

○土ノ上へ蒔シ餅成ルヘシ又豆  
腐ヲ喰セタルヲ言フ

紅葉負名目款

日頃の袖をいひこま引  
合せて向上乃は了了人  
曉臥唱ふ歌聲明王の眠  
を尋らすはもむもむ羅  
乃花軍一もみもみ合  
五十子合  
答分

後歌乃追手ハ梁の紅葉あり  
此  
馬子  
土餅あり豆腐あり君よ歌  
二對乃名目ハ立ありるる  
あはあちつる所あり  
是ハ  
後歌や同くこの紅葉負



○百性ノ食國ト在所トカ、  
ル白ヲハツニ見テアマシムナリ

○百性ノ食國ト在所トカ、  
ル白ヲハツニ見テアマシムナリ

とらひし其品をいれしる  
紅葉烏唐よかきるる  
以新嘉の園者場を食ひ  
てを乃らさちるるを見  
土の力葉角力乃か他平  
かしちを土餅とつ  
豆膏の和りあ  
蕩翁の白をいれしる

○トキヲ作りニ下ユテ蹴合シ  
タリ

○鳥ノ足ノ爪三本ナレハ鉄輪ニ  
似タルトナリ  
○競見シ僧ノヨフニ作タリ是  
モアラソウモノナレハナリ

五十六合  
時下<sup>トキヲ</sup>に<sup>ロ</sup>後悔<sup>ロ</sup>たり<sup>△</sup>蹴合<sup>△</sup>時  
乙字右二字  
時<sup>△</sup>は乃<sup>△</sup>根<sup>△</sup>を<sup>△</sup>孺<sup>△</sup>の<sup>△</sup>鉄<sup>△</sup>輪<sup>△</sup>を  
むらひる。標<sup>△</sup>の木<sup>△</sup>に<sup>△</sup>の<sup>△</sup>ほ  
下<sup>△</sup>睡<sup>△</sup>き<sup>△</sup>見<sup>△</sup>物<sup>△</sup>目<sup>△</sup>を<sup>△</sup>さ<sup>△</sup>は  
乃<sup>△</sup>可<sup>△</sup>度<sup>△</sup>也<sup>△</sup>。食<sup>△</sup>つ<sup>△</sup>き







湖江ハ渡鳥名ナレ

○曾我物語赤澤山ノ所ニテ  
書出シタリハシ國ノ渡リ鳥故  
唐ヨリ書ツケ邪慢我慢ハ  
唐ノ角カノ名ナリテツハセイ  
ウナト云フ日本ノ角カチカラ  
テヘセシ古紙紙ニアリ  
スカフ足ノミチカ鳥ニヤ

捕距武

是ノ木の根ハ<sup>ウ</sup>と後<sup>ウ</sup>方  
のい<sup>ウ</sup>ハ<sup>ウ</sup>員<sup>ウ</sup>後<sup>ウ</sup>に<sup>ウ</sup>  
道理古湘江昔渡<sup>ウ</sup>乃唐  
織<sup>ウ</sup>を<sup>ウ</sup>め<sup>ウ</sup>つ<sup>ウ</sup>邪<sup>ウ</sup>慢<sup>ウ</sup>家  
後<sup>ウ</sup>手<sup>ウ</sup>ふ<sup>ウ</sup>つ<sup>ウ</sup>き<sup>ウ</sup>三<sup>ウ</sup>番<sup>ウ</sup>打<sup>ウ</sup>  
の<sup>ウ</sup>い<sup>ウ</sup>ハ<sup>ウ</sup>員<sup>ウ</sup>後<sup>ウ</sup>に<sup>ウ</sup>  
後<sup>ウ</sup>手<sup>ウ</sup>ふ<sup>ウ</sup>つ<sup>ウ</sup>き<sup>ウ</sup>三<sup>ウ</sup>番<sup>ウ</sup>打<sup>ウ</sup>  
の<sup>ウ</sup>い<sup>ウ</sup>ハ<sup>ウ</sup>員<sup>ウ</sup>後<sup>ウ</sup>に<sup>ウ</sup>

○尾ノクセヲ毛虫ニテ樹ニ直ス  
トナリ

五十八合

雌<sup>ウ</sup>毛虫<sup>ウ</sup>下<sup>ウ</sup>樹<sup>ウ</sup>羽<sup>ウ</sup>癩<sup>ウ</sup>り<sup>ウ</sup>か

屯

雪花

い<sup>ウ</sup>さ<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>ひ<sup>ウ</sup>乃<sup>ウ</sup>別<sup>ウ</sup>き<sup>ウ</sup>や<sup>ウ</sup>唱<sup>ウ</sup>ふ<sup>ウ</sup>登<sup>ウ</sup>下<sup>ウ</sup>

○朝合セシトリノ昼ニ別ヲ唱フ  
トナリ  
○書ノ名桑椹ニツ共ニカハナリ  
○人ノ妻ノ醉興ノ夫ヲアツカフ  
ヨフニ作タリ

以<sup>ウ</sup>酒<sup>ウ</sup>を<sup>ウ</sup>以<sup>ウ</sup>炮<sup>ウ</sup>ハ<sup>ウ</sup>桑<sup>ウ</sup>椹<sup>ウ</sup>以<sup>ウ</sup>酒<sup>ウ</sup>



○三ツ羽四ツ羽ノ茶ノ羽筥ノ  
ヨフニ作タリ左リ羽ニテ茶臼ヲ  
ハクニクセアリテムツカシトナリ  
左へ廻ス手者角カニカケタリ

○角カノモメノヨフニ作タリイカ  
ニアカム別レト云ツケタリ曉ノ  
別ヲ登ノ別ニ作モメテ昼頃ニ  
人ヲ打出シタルナリ  
○待宵ふるけり鐘の聲や  
あつぬ別の鐘はものうら

よびと云々其妻解真の  
羽癖をつて返ひもろ子  
屋にけりてるをえり左へ  
廻る手者みや茶臼をふも  
かきこしん  
おは樂座がもろと見え  
いり早天かす乃尺物鉢  
卧る角カ櫛のぬい

○飄鷺タシタル所ヲ廻廻ニツ  
カマレトナリ  
○將軍木ノ木ニテ軍ノサイハイ  
ヲ作ルモノナリ  
男ノ役シヤユヘヒトリハヨモ寐マ  
シトナリ  
○夫木  
為崎やゆききの春の落す

あつぬ別の鐘はものうら  
五十九合  
其角  
風負乃つものまろや一個  
叱石こ  
後軍木子独ハぬや旗乃後  
甲の志こ落毛をつみ上  
いゝ後首隠波行鬼也







○ツケヨレ絶入ト云ニカケテ  
泡トヲキタリ

○揚弓ナトノヨフ作タリ花月  
ノ惣一ナリト  
○五條橋ヲヨフニ舎那王トノ  
一辨ケイトカケタリ雞ノヲモ  
シロシ

○鬚鳥厩カラ出ル奴ナトノヨ  
フニ作タリ

○上野の佐野の舟橋と云  
は親ハさくられと我ハさくら  
カ  
○ヲリヒニモ地鳥ト云フヲ出  
スナトナリ

○關ヘカケ關内ニニ

○クタカケトツケントテ仰ハ  
タタト云フ俗言葉ヲ書出ナリ

胸を突て絶たる渦

やひ廻る大拍樂乃ら

乃泡と云ふ人々

花月惣一

おははもの辯發合さる

ね下まらうて肝を

國さりのる

六十一合

鬚鳥の厩かゝ出て鳥ハカ

五字

毎閑

意ヘヨクヒに地鳥と云ふ鳥。伯樂

七乃矢所俞匠けをう河を

真黒ふ毛孺。関内もを

乃沙意をいふ仰

乃カケ乃也事口世界



○取ハシト云フ所ヘカケテ鳥ハ  
外ニナシトナリ

○厩カラ出タルト云ニテニセルノ  
ヨフニ

○ツクセヤカサレ共末ニシ化  
ヲワルハトナリタカノ餌ニ成ト  
ナリ

○投打ノ艸履ヲ腹立テ鳥ノ  
ツノクトナ庸僧ナト、ノヨフニク  
ツトヲキセツハ、禪家ニテ二人  
モントフノヲ云カ関ト置タリ

○今日ノ闕難ノ關ヲカユツテ籠  
ノウチヘ入ヲモレカ外ノケ合ヲ  
見テ狂フトナリカニハ崎信濃  
ナリ女房ノ狂イ出ル能ナリ鳥  
ノカレハヘカケタリ

○童僕ノ喧嘩ニ書替タリヨク  
中ワルクナルヲセツハト云フナリ

國土中ナリ  
欠伸遠慮心をつきて行  
相をいふ  
也さめく乃手入今日の見  
さる襟裾をさきり  
不當坐は丈夫な事  
其化りくく鵬乃  
餌あり

六十二合  
投打乃履を相手やせつハ関  
乙や

今日の関籠を狂やりの崎  
五字  
伊勢町小田原早登大  
乃津河



會盟ノ名主難義スルトナレ  
 吳越ヨリ長安ト書結ヒタリイ  
 セ丁小田丁篋ル  
 會盟ノ名主難義スルトナレ  
 吳越ヨリ長安ト書結ヒタリイ  
 セ丁小田丁篋ル

下恥合ふ。童僕の心も  
 亦志のりしめく。獨遊ひを  
 亦は惣くのなふる者  
 今も年比日頃乃意趣を  
 合了吳越乃名主を煩ら  
 是れ繁花長  
 外安乃江戸氣なりて飽迄に  
 之より肥る由也

○今日ノ關へ大兵トカケ鳥ノ  
 客ヲ云ナリ  
 ○謡  
 越後ノ國ヲ出テトアリ  
 國ノ府中ナリ  
 ○越後ト云ヨリテ川中島  
 軍ノヨリニカキツケ龍虎漢  
 楚皆吳越ノツイニ結ヒテ手ヲ  
 昼ニ書タリ

或人乃いふ信濃の  
 大兵也其卵も九年母有  
 といふといふ見の越後  
 乃因符を荷ひて川中  
 島乃手合さんとも龍  
 虎乃成漢楚の争ひ足  
 書を末世の也とす  
 六十三合



○雞ノ耳タフノ白キヲ云フナリ  
軍中ニテ矢壺ヲ規ヨフニ作  
タリ此角ニテ鳥ノ規ヨルナリ

○鳥ノ余クハタラキテ血ニ深シ  
ヲ抱上テ人ノ手ヲイヲレヤ  
千ヲニテ洗フヨフニ幸今日ハ上  
巳十六ヒテ酒ニテスソセヨト  
ナリ

○トリノト云ニ鳥ヲカケ已レ  
カ鳥ノ羽ニ札ヲ付タリ乱軍  
ノヨフナリ袖印ナト、見ルヘシ  
谷ニ云ナリ  
○今日、關ハ大ニイハレタリ

辰下

聃白をさすのふ矢壺

乙字

百之

抱。今用此乃洗之。離此酒

たす。六箭合也。をのり  
大。胆にれはつす。放  
たす。をのり。をのり

○食ニハクイアイニナリ

○サリナカラ酒ヒタシノヨフニ吞  
ハ油断大敵ニトナリ

も。結さる。は。掛。す。つ。何。ま

り。子。喰。み。乱。ま。れ。ハ。抱。

分。い。ま。よ。き。ま。の。ふ

爪。の。す。そ。き。ん。と。酒。ひ。

世に成。は。つ。き。止。者

あ。う。心。を。り

油断大敵

六十叩合



○羣鳥ノアラソウ姿ナリ

○碁盤木偶ツカイナリ 關雞ヲ遣フナリ

○時一カケテ宵寐書出セリ

六十甲合

立胡

時。きり乃いさむし花

乙字とひ

碁盤もていさ函谷へ彌三五

時。り乃ごうちのち

下他の悪黨をさ次宵

くしもの宵寐ハハ聲の

觸頭ある存 右ハ盃

○雞聲カ胡事ハフルトテ雞術ヲツクシムカシノミチノ容テ越レテ敵覽人形ノ名ヲアケ更領ス

○飛弾一人ニ本非

○おのきすまひいこのたごみのの斧立あかりーっまーなるそや世の中本

嘗君の手のもの乃いさむし  
さうしに其ま  
とてたのしき手をつ  
ろくしは  
敵覽  
人形乃名を向飛弾  
乃椽と受領を  
昔のものを



イニ書タリ内匠椽ナリ又和漢  
トツイニテ結ヒ孟嘗君カ傳史  
記ニ有レハ日本ノ史記ニモノセ  
タキトナリ  
○内匠名人ニテ唐造行戻  
ニツルヲ作ソレハノリ日本ニ歸  
ル鶴ノ羽御方落シ所ヲ羽形  
ト云ト今ニ霍飛彈ノ末葉ト云  
アリ

○難波ニ住居スレハコレニテ文字  
ヲカキカケ首尾ニシタリ  
○山鳥ノヲロノカミハカケタリ  
○山鳥のおうのほつちを子孫  
けてとふへいこころを名うと  
そひけめ

○サカ毛イカル容ナリ  
○今深ナトニテ言フ淺黄トハ遠  
フ白ト黒ノ毛ノマサリテ鼠色  
ナルヲ言フ同士軍ケセリ  
○尾狂ヒニ獅子ニハタラク逆毛  
我トシタラヨカソレモ先年  
セシトナリ

そのり今乃下りてみハ形を  
工と出たり和漢乃通例  
を以て冥亦の史記も  
のさぬ居りてそれハ鶴の  
是ハ終動也  
將多は羽形なれども  
難波は名ニ羽と番ハ  
六十五合

尾狂子お路を何は逆毛が  
左右乙字  
雪花  
蹴廻りヤ淺黄はあらず同士  
尾狂るりし中  
後乃獅子をけり逆毛ハ  
此句々文の子底之予々末  
練も中々也尾狂ひ乃



〇乳口牛後 戦國サクニ出タリ  
 〇山崎ノ...

獅子ノ...

〇角時代ハ淺黄ノケ廻シハヤリ  
 〇ツマトリ角カノ手ナリ此トシ  
 〇卒家物語スハ落セナリユメ

〇河ノ...



宜し蠅拂鳥ノ羽ヲツケタルテ  
ノナレハナリ  
○孫子ナリ言盡書盡シハ六十  
六合迄ノナリハナリハナリハナリ

孫子ナリ言盡書盡シハ六十  
六合迄ノナリハナリハナリハナリ

くふをとおきしむを蠅拂  
軍旅乃中聞つしむ  
つしむ書はくしむ  
中しむ小荷駄のしむの  
作候乃もの此陣のしむの  
そつ廻しつ巻るのしむの  
ふし矮弱のしむのしむの  
しむのしむのしむのしむの

孫子ナリ言盡書盡シハ六十  
六合迄ノナリハナリハナリハナリ

坂落平曹司のしむの  
得しむのしむのしむのしむの  
のしむのしむのしむのしむの  
のしむのしむのしむのしむの  
三十騎をのしむのしむのしむの  
落蠅拂のしむのしむのしむの  
のしむのしむのしむのしむの  
しむのしむのしむのしむの



○カ尾尾ノ姿ナリハタノヨフニハ  
タラクトナリ穂ニ出タル草ノヨ  
フナリ

○世ノ中サハカレキトキハ四境  
ニテ木綿付雞ノハナレ御稜有  
丁ナレハナリ

くみてし...

秘傳乃...

六十七合

百之

カ尾や旗...

二字...

坂の番...

務閑引音...

○手ノマイ足ノフミトナキト俗  
言フト同シ

...

○逢坂五關トカケ

朱冠を...

うけの...

をひま...

濁され...

尾の白...

ら...

関乃...

上再拜...







○一茶目公美、新州殿十八

○朝出富士ノ姿ナリソレニツキ  
テ行タカルナリ

○火ヲ以テ鳥カレモナリ  
テ行タカルナリ

粉俵より内六万を

陸より志をけをさす

多しれ評評をさす

五十九金

了士乃能もふまの

戴冠文

毎閑

火のやばあきつ

二字

落足手負志は

の蹄よついでちり

ありさる鮑乃尾

乃口をののし

悲心仏法僧の

れと三井さよ

月為鳥啼

○軍中ノ乱レ立タルヨヲニ書タリ  
虎ノ尾ヲ踏毒蛇ノ口ヲ鳥ニカケ  
テイタチノ尾犬ノ口ト對ヲカキ  
タリ又松ノ尾山ノ慈悲心ト日光  
ノ仏法僧トヲ又ツイレテ書タ  
リ太平記大塔宮ノ三井寺ニ  
カケ込レヨフナリ仏法ヲ結テ三  
井寺ト置タリ

○寒山寺ノ詩ナレヨレモ面白  
筈火ツキヨリウニ出シ



○鳥ヲ雉ニカキカイカン食時  
節ヨシ

○馱鳥火ヲ喰フ鳥モアリ  
○身ノ色山吹ナリ鳥ノ血ヲホ  
リテ飯ヲタクモノナリ梔ヲウラム  
千ヨフセン人ヘカル

所ニハ毎火消す  
乃の事も焼  
の雉峰よ  
かりつ  
家を氣つ  
もさ  
火よ  
大鳥もハ尻を山吹よ

○人ニナヤカス別レヲナキレムク  
ヒ業因ニテカクナレ別レヲセメテト  
言テ朝出ノ鳥ヲカキトタリ

○大傳馬町馬籠甚解ヲ佐久  
間ト云フ山王神田ノ祭リニ第

梔を根と肉を大根  
あつて銀杏を別  
むも前世の業因  
あられ人乃  
涙の夜を  
のちも  
七十合  
其角



一番ニ諫鼓ノ出シテ出ス  
 貝合ノ貝ヲ桶ノ内ヨリ先ニ  
 出シテ取ルナリソレヲ出シ貝ト云  
 フ跡ヨリモ又十二出サントナリシ  
 ニ五十二揃ト言フ伏兵ノヨク作  
 タリ  
 ○諸鳥ノ下ナレバイソカ雞ノヨ  
 フニ夫下アママテル  
 ○山王氏子ナリ

一番乃勝を佐久間。波流  
 五字  
 見のつら  
 諫鼓若深ク治後坊ノ塵  
 静也と云や申氏の内  
 の力あはれ後者一書乃祭  
 をつと老奉ふ是例身  
 見

○雞ヲ籠ヘ入ルヲ貝桶ニ住舞  
 ヲ三作タリ角カヲトリ勝負  
 ニレ關ト關ハシマイニトルモノナレ  
 ハ水引モトラセリ四本ノ水引  
 鳥ノ跡ハ  
 蒼頡カ古事實トレト六貝ヲ

を意  
 見十二隠  
 見十二  
 勢  
 林の夜乃千  
 直を一在り  
 司



タルナリイニニ六貝ヲ錢ノヨ  
ニシテ遣タリ

○あこやまういひのひを  
つとむるて寝のおしひ見  
るなるまはる

寶永ノ年号ヲワリテ書  
リ正木ノカツラ古今ノ序

○沙之汰之セ、ツニ出タリ山  
金ノヨリ出シナリ

○後白川法皇ヲサスキルヘ  
山ノ離宮ナリ待従ナリヘ  
ソノフニテ待ノ字ヲカキタリ

○葉枝 ツツヒス 鳥ノ休ムヨナリ

○笛ノ類ヲ管ト言イ張ノ有  
ヲ張ト云フ太鼓ヲ入タルヲ音  
樂ト言フソノ時ハ弦ノ類ヲマ  
ル樂ヘ伶人ノ入タルヲ舞カ  
リト云フ

青山 山ノマ トナリ

妙々 ハ 箱ヲハ袋ニ水  
引キ ハ 鳥ノ跡ヲ  
寶 ハ 正木ノカツラ  
ヤ ハ 年ノ元ノ時乃  
鼓 ハ 鳥ノ跡ヲ

鳥沙汰曰

兼安二年五月二日東山  
乃仙洞ニテ院合乃月

り公卿待従僧徒上下乃  
北面の葦常ヲ祇候乃者  
も左右をさるる銀花  
木 ハ 乃銀臺 ハ 乃藤乃花  
牡丹山次乃作 ハ 花 ハ 乃  
乃 ハ 伶人 ハ 乃集 ハ 乃春













八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十



